

## 「二ホンザル被害対策について」 (技術向上研修の開催)

1月18日に総合  
農試で技術向上研  
修会(サル対策)  
を開催しました。

研修内容は専門  
家による講演と現  
場実習を行いました  
たので、その一部  
を紹介いたします。



講演はリモートで実施

### 演題 「二ホンザルの効果的な被害 防止対策について」

講師 兵庫県立大学 山端直人氏

「サルは賢いから何をしても防げない」という諦めの声が現場では聞かれるが、その生態的特徴を踏まえた効果的な対策を実践している地域では被害を大幅に減らすことに成功している。

サルの生態的特徴は、メスを中心とし、遊動域が大きく、エサ場を求めて移動していく。その際、エサ場の要件となるのは、採食できる豊富なエサの存在と、安全に食えることのできる環境である。この要件を満たさない場所(エサ場としての価値が低い場所)にしていくことが重要である。

### 効果的な対策とは

まず、エサを無くしていくこと。水田の収穫後の落ち穂やひこばえはすくすくすき込む、麦や大豆、タマネギ等の収穫残渣は適正に処分し、収穫しない栗や柿、柑橘の木は除去する。

二つ目は、隠れ場所を無くすること。集落内にある耕作放棄地や竹藪を刈り払って見通しをよくする。

三つ目は、囲える畑は、おじろ用心棒等サルに効果のある防護柵で正しく囲うこと。

四つ目は、サルを見たら必ず追い払いをすること。この際、大切なことは集落みんなで組織的に行うこと。しかも、群れの動きをみて流れに逆らわず、集落のはずれまでしっかり追い払うことである。以上の取組は、個人や集落が自らの問題として団結して主体的に取り組むことが重要となる。

五つ目は、個体レベルではなく群れ単位に頭数をコントロールすることであり、行政の役割となる。多頭数の群れを追い払い可能な数まで削減し、行き場のない少数の群れを全頭捕獲しながら、悪質な個体を選択的に捕獲する。

### 獣害に強い集落づくりのための支援方法

獣害対策は地域ですべきことは地域で、行政がすべきことは行政で実施するという役割分担が重要であるが、まずは、地域が主体的に取り組むための働きかけや支援方法(ステップ)が重要である。

#### ステップ0

関係機関で集落支援業務を共有

#### ステップ1

役員等と集落の要望や問題、対策の方向性などを確認

#### ステップ2

役員の案内で集落の課題がありそうな場所を見

#### ステップ3

センサーカメラ等で課題を可視化

#### ステップ4

地図を見ながら被害の聞き取り

#### ステップ5

住民の共通理解を得るためにも研修会や説明会を開催

#### ステップ6

研修会後、数班に分かれて実際に現地を点検

#### ステップ7

ワークショップで住民の意見を集約

#### ステップ8

決まった被害対策を実施

#### ステップ9

定期的な巡回・訪問等でサポート

#### ステップ10

結果を評価し、課題改善につなげる

★効果を持続させるため、公は改善を促し、支援していくことが仕事を

### 演題 「県内における二ホンザルの 生息状況と被害について」

講師 鳥獣被害対策支援センター

・野生鳥獣による農林作物等への被害額は、令和2年度は、約四億二千三百万円で、元年度に比べて約二百六十一万円、約1%の減少となった。  
・サルによる被害額は、約五千六百万円で、前年より20%増えている。  
・サルによる被害の品目別割合は、果樹61%、野菜18%、いも類7%等となっている。

・生息域は県内全域となっており、推定群数は99群、推定頭数は三千から四千頭となっている。

### 現場実習

実習では、手軽なサルの追い払い道具として、ロケット花火を安全に発射できるサル鉄砲を各自で水道用塩ビパイプを加工して作成し、それを使って試射を行いました。次に、ワイヤーメッシュ柵の上部に電気柵を組み合わせたサル用防護柵の設置実習を行いました。



サル鉄砲作成とロケット花火試射



複合柵の設置

被害対策に関する問合せ

西臼杵支庁及び各農林振興局  
各市町村・各農協・各森林組合 等



# ☆鳥獣被害対策地域特命チームだより☆

## 東臼杵(南部)地域

○令和3年度鳥獣被害防止対策研修会を開催

日向市、門川町、諸塚村、椎葉村、美郷町のそれぞれの市町村において、今年度新たにワイヤーメッシュ柵設置を行う農業者が参加し、鳥獣被害防止対策研修会が開催されました。

各市町村とも、シカ、イノシシ、サルによる水稲や果樹、人工林等への被害が発生しており、研修会はその対策の一環となっています。

研修会では、普及センターから「獣から、みんなを守る集落づくり」と題して、鳥獣被害が激化するのには、集落に廃棄された作物残渣やひこばえなどの無自覚の餌により、餌付けが進んでしまったことや、人を怖がらなくなったことが原因であることとを説明しました。

また、鳥獣被害対策に成功した県外の事例をDVDで紹介し、集落みんなで協力して対策を行うことで、効果が上がることを理解していただきました。

次に、鳥獣被害対策支援センターから「ワイヤーメッシュ柵の設置および維持管理のポイント」と題して、効果的な柵の設置位置や、設置後の雑草対策の重要性等を説明し、その後、屋外で実技研修として実際に柵の設置を行いました。



ワイヤーメッシュ柵設置実地研修



室内研修会

市町村からは、柵設置の工期や、設置後に提出が必要な書類等の注意点が説明され、今後この研修会で学んだ手法を活かしながら、各集落で柵の設置が進められます。

## 北諸県地域

北諸県地域で、ガラスによってハウスのビニールを破られる被害が発生していたため、鳥獣被害対策支援センターにご協力をいただき、ガラス対策の実証を実施しましたので、ご紹介します。

今回は、「トリサッタ」という鳥類が嫌がる音が鳴る機器とハウスの周辺をテグスで囲み、侵入を嫌がらせる方法との2つの合わせ技の効果の検証を行いました。

### ○トリサッタの設置

トリサッタは、ハウス前の電柱に取り付け、バッテリーで稼働させました。

### ○テグスの設置

まず、長さ1m程度の19ミリパイプをハウス周辺に3〜5m間隔で打ち込み、その後、先端にテグスを付けた長さ3mの22ミリパイプを、最初に打ち込んだ1mのパイプの上からかぶせてハウスの周辺にテグスを展帳しました。

今回は、生産者と関係機関の計7名で設置作業を行い、約25アールのハウスに2時間程度（テグス2時間弱、トリサッタ5分）で設置が完了しました。設置費用は、6万円程度です。

### ○効果の検証

トリサッタを起動すると、付近の森に潜んでいたガラスが飛び立ち始め、連続して稼働させると100羽ほどのガラスが森から飛び立っていききました。

その後数週間は、ガラスの被害はなくなりましたが、設置から時間がたつと、トリサッタに慣れてきたのか、ハウス周辺に戻ってくる個体も出てきたため、トリサッタを台車に乗せ稼働場所を時折変えてみたり、テグスを増設するなど、慣れへの対策を実施しました。

このように鳥類による被害に對しての対策は、慣れが生じることで、効果が薄れていくため慣れを生じさせないような工夫や追加的な対策が必要だと実感しました。また、トリサッタは結構なボリュームの音になるため周囲への配慮が必要です。



トリサッタ設置と稼働後に森からガラスが飛び立つ様子



テグスを付けたパイプを設置する様子